刑務所作業製品への抵抗感と嫌悪感受性、道徳基盤、穢れ観の関連

松尾 朗子（東京大学 先端科学技術研究センター，matsuo.akiko.1005@gmail.com）
向井 智哉（東京大学 法学政治学研究科，mukait@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）
田中 友理（多摩大学 経営情報学部，tanaka-yu@tama.ac.jp）
唯 なおみ（東京大学 先端科学技術研究センター，jftyui@gmail.com）
熊谷 晋一郎（東京大学 先端科学技術研究センター，u-kumashin@g.ecc.u-tokyo.ac.jp）

The relationships between avoidance toward prison work product, disgust sensitivity, moral foundations, and pollution avoidance

Akiko Matsuo (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)
Tomoya Mukai (Graduate Schools for Law and Politics, The University of Tokyo, Japan)
Yuri Tanaka (School of Management and Information Sciences, Tama University, Japan)
Naomi Yui (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)
Shin-ichiro Kumagaya (The Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo, Japan)

Abstract

People are often unwilling to approach something that they perceive to be contaminated. Perceived contamination is associated with disgust and can be explained using the concept of magical contagion. As disgust is associated with the morality of purity, the role of disgust in the relationship between morality and the perception of contaminated things needs to be scrutinized. This study investigated how people are motivated to avoid something that they perceive to be contaminated with the Moral Foundations Theory as its theoretical framework and prison work products as the study object. In addition to the traditionally used scale to measure one's concerned moral foundation(s), the moral values regarding purity and religiosity in a specifically Japanese context were measured using the Purity Orientation–Pollution Avoidance Scale, which has four subscales: Mental Purity, Respect for Religion, Bodily Purity, and Pathogen Avoidance. The results reveal that contamination-related disgust mediates the relationships between the Respect for Religion subscale and avoidance toward prison work products, as well as between the Pathogen Avoidance subscale and avoidance toward prison work products. The present study was novel in that it clarifies the relationship involving morality, disgust, and avoidance. The implications of these findings tap into some topics involving cultural differences.

Key words

prison work product, disgust sensitivity, moral foundations, pollution avoidance, purity

1. 序論

商品を購入する際、品質よりも製作者が重視されることは珍しくない。有名な職人の手による商品だと聞けば、それが決め手で購入することもあるだろう。対して、「犯罪者」が作ったというだけで購入をためらうこともある（水谷，2021）。

現行法上、懲役刑を宣告された受刑者には刑務作業が科される（刑法 12 条 2 項）。この刑務作業は多岐にわたるが、一部の受刑者は製品の製作に従事し、製作された製品は刑務所外部の人に即売会や通販サイトを介して売却される。製品の種類は家具や日用品、文房具など様々である（公益財団法人矯正協会，2022）。このような製品の売り上げは、出所時に受刑者に渡されたり、被害者支援団体に渡される。また、手工業などであれば受刑者は手に職をつけることができる。これらのことから、刑務作業が盛んになることは、被害者支援や受刑者の社会復帰にとって利益となる。

しかしながら、刑務作業で作られた物品は、それ自体には瑕疵がなかったとしても「犯罪者が作ったもの」というだけで避けられることは想像に難くない。歴史的文献を基にした解釈からも、罪人は穢れと考えられることが多く（網野・石井・笠松・勝俣，1983; 波平，1984; 山本，2009; 渡辺，2005）、過去に罪を犯した者との接触は回避される（村山・三浦，2017）。刑務所作業製品は、犯罪者の罪という「穢れ」が移ったものと知覚され、購入に抵抗を感じる商品と予想される。本研究の目的は、刑務所作業製品に対する回避をもたらす心理的メカニズムを検討することである。

1.1 穢れを感じられる対象

人は自身の生存の脅威となる対象を回避するように動機づけられている。古来より、人間は生存の脅威となる病気にかからないよう、毒や腐ったものを避けて身体的・精神的清浄を志向してきた（北村，2021; 国立歴史民俗博物館・花王株式会社，2022）。体内に異物を摂取する際にその異物が危険かという予期をすることや、万が一危険な物を摂取した場合は身体防衛の機能が働くというのは生存のための重要な戦略である（Haidt, McCauley, & Rozin, 1994; 今田，2019）。

自身の生存の脅威となる対象を回避するトリガーのひ

とつに嫌悪がある。嫌悪は、病原性を予期させる食物（苦味、酸味）や身体分泌物などによって喚起される（Oaten, Stevenson, & Case, 2009）。つまり、嫌悪は最終的な回避行動を促すために、回避すべき対象の手がかりに気づかせる働きがある（Troop, Treasure, & Serpell, 2002 も参照）。

「生存の脅威となる対象」とは、毒や腐敗物のように身体を直接的に害する物はもちろんだが、象徴的な害悪も含まれる。例えば、「大量殺人者」という人格特性（Nemeroff & Rozin, 1994）、すなわち道徳的逸脱者はその 1 つである（Donnelly, Itakura, Gjersoe, Hood, & Byers, 2011）。既述の直接的害悪が体内の身体的機能を阻害する可能性があるのと同様に、道徳的逸脱は集団内での秩序紊乱のシグナルとなりうるため、生存の脅威となる。直接的害悪においては対象物を吐き出すことで身体的健康・清浄を維持し、象徴的害悪の場合は逸脱成員を排斥する（遠ざける）ことにより、成員同士の結束や集団の構造を維持するよう働いていると考えられる（松尾・田中，2021）。

このように、人は自身や集団の生存の脅威となる対象を回避するために、毒や腐ったもの、また道徳的逸脱者に対して嫌悪を抱くように進化してきた。しかし、脅威となる対象そのものだけでなく、その対象と関わったモノに対してもまた、回避反応は生じる。

人・モノが接触することで、そのモノの性質が人（またはその逆）にまるで乗り移るように感じることを魔術的伝染（magical contagion）という（Frazer, 1890 吉川訳 2003; 外山，2019）。乗り移ると信じられる性質はポジティブとネガティブのどちらもありうるが、特にネガティブな性質が伝染したと感じられることを心理的汚染という。例えば、動物の体液と接触した人に対しては、動物の体液から推測されるネガティブな特性（病気など）が乗り移っていると感じられる。この「汚染感」は病気のように伝染するものだと考えられている（Nemeroff & Rozin,1994; Niemi & Young, 2014; Pavarini & Schnall, 2018）。発達的観点から論じられることが多いものの（呉屋，2022）、大人でもこの信念が見られることが報告されている（Toyama, 1999）。このように、魔術的伝染においては、ネガティブな性質を持つ感染源と接触した人物・モノにその性質が乗り移り、さらにその人物・モノと接触した場合は同様のネガティブな性質が乗り移っていくように感じられる。

1.2 清浄性に関する価値観

上述のように、人は自身や集団の脅威となる対象に嫌悪を感じ、回避する。そして、このような嫌悪を抱く対象は、脅威となる対象そのものだけでなく、その対象と関わったモノも含まれる。それでは、このような回避反応はどのような要因によって規定されるのだろうか。例えば、この回避反応の強さに影響する個人差として、清浄性に関する価値観が考えられる。

Haidt（2013）の道徳基盤理論では、人間が道徳判断の際に参照する 5 つの基準を提唱しているが、その中のひとつである清浄基盤は清浄性・神聖性を志向し不浄性・卑俗を忌避するものである（Graham & Haidt, 2010; Lee & Schwarz, 2010; Zhong & Liljenquist, 2006）。清浄基盤の違反（例えば、汚いもの）は嫌悪を喚起すると考えられており（Horberg, Oveis, Keltner, & Cohen, 2009; Rozin, Lowery, Imada, & Haidt, 1999; Russell, Piazza, & Giner-Sorolla, 2013）、日本人を対象に行なわれた追試でも同様の結果が得られている（北村・松尾，2022）。

汚いものや道徳逸脱者に対する回避反応は、嫌悪によって生じている。嫌悪は特定の事物への反応としても測定されるが、個人差傾向としても測定される。ある特定の事物に対してどのくらい嫌悪を感じやすいかの個人差は、嫌悪感受性という言葉で概念化されている。嫌悪感受性とは、嫌悪誘発子に晒された際の嫌悪体験の激しさや、嫌悪体験を否定的に認知評価する程度である（岩佐・田中・山田，2018）。嫌悪感受性の測定にはいくつかの尺度がある　が（Kleinknecht, Kleinknecht, & Thorndike, 1997; Tybur, Lieberman, & Griskevicius, 2009）、Disgust Scale-Revised（DS-R; Kang et al., 2012; Olatunji et al., 2007; Olatunji et al., 2009; Wang, Yang, Huang, Sai, & Gong, 2019）による測定が広く行なわれている。嫌悪感受性が高い人物ほど、汚いものや道徳的逸脱者に対する回避反応が強いことはいくつかの実証研究で示されており、例えば、嫌悪感受性が高い者は、殺人者と接触した人物（例えば、感染源に接触し穢れた人物）を回避する傾向が確認されている（池田・山田，2021）。また、嫌悪感受性が高いと汚いものに対して敏感になるため、環境の中で脅威となるものを検出しやすいという報告もある（Sherman, Haidt, & Clore, 2012）。

清浄基盤を重視する人は、清浄性を脅かすものをいち早く検出するよう動機づけられていると考えられる。嫌悪は回避すべき対象の手がかりに気づかせる働きがあるために、清浄基盤を重視すると嫌悪に対してより敏感になる可能性がある。そのため清浄基盤の重要性が高いほど、嫌悪感受性も高くなると推測できる。上述の嫌悪感受性尺度により測定される嫌悪感受性には下位因子が存在する。例えば DS-R においては 3 因子あり、1 つ目が中核的嫌悪、2 つ目が動物性嫌悪、そして 3 つ目が汚染嫌悪である。中核的嫌悪は、原始的な嫌悪対象（嫌悪誘発子）といえる有害な食物や排泄物などに対する嫌悪、動物性嫌悪は、身体損傷や性行為など人間の動物的側面を連想させるような嫌悪、そして汚染嫌悪は、病原性を予測させる誘発子に対する嫌悪である（今田 2019; Olatunji et al., 2007）。嫌悪はその誘発子により目的も機能も異なる可能性があるので細かく検討すべきとの指摘があり（岩佐，2021; 2022）、本研究では下位因子を考慮に入れた。

さらに、西洋においては清浄性に対する価値観を、道徳基盤尺度（Moral Foundations Questionnaire, MFQ）で測定することが一般的である（Graham et al., 2011）。しかしながら、清浄基盤は複数の側面を内包した複雑な概念であり、単一の基盤として扱ってしまうと例えば清浄性と宗教性などの複数の要素が混同されるのではないかという指摘もある（青山，2020; Crone & Laham, 2022; Koleva, Graham, Iyer, Ditto, & Haidt, 2012; 村山・三浦，2019; Zakharin, & Bates,

2021)。具体的には、MFQ の清浄基盤項目はキリスト教的前提のもとに開発されたので、日本文化においては適切に清浄性に関する価値観を測定できていない可能性がある。日本における清浄性は歴史的・宗教的に、一神教（特にキリスト教）が多数を占める西洋のそれと同等なものとして扱うのは限界があり（北村，2021)、西洋で開発された MFQ では日本における神道をはじめとする宗教的影響は測定できない。実際に、MFQ による各基盤の測定に関して安定した結果が得られていないことが示されている（村山・三浦，2019；野波・坂本・大友・田代・青木，2021 など)。このような文化的影響を考慮に入れた日本人の素朴な宗教心や清浄性の感覚、「穢れ」観の測定のために開発されたのが穢れ忌避尺度である（Purity Orientation–Pollution Avoidance Scale, POPA: Kitamura & Matsuo, 2021)。POPA により測定される穢れ観は、日本における清浄基盤と考えられ、4 つの下位因子を持つ。精神の浄化に関連する「精神清浄」、神社仏閣への信念に関連する「信心尊重」、性行動に関連する「身体清浄」、そして有害な食べ物や病気に関連する「感染忌避」である。加えて、日本においては、MFQ によって測定される清浄以外の基盤も清浄と類似もしくは異なる特徴的な機能を持つ可能性もある。したがって、本研究においては、先行研究で多く用いられてきた MFQ による各基盤の測定に加え、POPA も用いて清浄性に対する価値観の程度を測定した。

2. 本研究の目的と分析の枠組み

2.1 目的

以上の議論より、刑務所製品購買への抵抗感には、嫌悪感受性および道徳基盤が関連している可能性が考えられる。しかし、刑務所製品購買への抵抗感はこれまでの実証研究では全く検討されていない。このような状況下では、どのような変数が抵抗感と強く関連するかを検討することには、今後の研究においてどのような変数に着目すべきかを示唆しうるという点で意義がある。そこで本研究では、これらの独立変数と抵抗感の関連を検討することを第一の目的とする。

また、嫌悪と清浄性に関する上記の研究からすれば、本研究で検討する独立変数（嫌悪感受性、道徳基盤）の間には、道徳基盤が嫌悪感受性に先行するという媒介関係がある可能性がある（図 1)。上記の通り、刑務所作業製品が促進されることは被害者・加害者双方にとって利益となり得る。したがって、その購買の抵抗感を低減する方策を検討することには社会的意義がある。そして、媒介メカニズムを明らかにすることはこのような抵抗感の低減に向けた方策を考案する上で有益である。よって、この点を検討するために、嫌悪感受性を媒介した道徳基盤の抵抗感への効果を検討することを第二の目的とする。

なお、以上の 2 つの目的については、調査実施に先立って事前登録を行なった（https://aspredicted.org/44yr4.pdf)。とはいえ、道徳基盤（中でも本研究で特に重要となる清浄基盤）については、西欧で考案された概念であるため、非西欧的ないし日本的な穢れ観を測定できない可能性がある。そこでこの穢れ観を測定する尺度である POPA を含め、道徳基盤と並べて探索的に検討することを目的 3 とした。ただし、穢れ観については事前登録で記述されていない変数であるため、後述の重回帰分析および媒介分析においては他の変数（嫌悪感受性および道徳基盤）のみを用いた分析と、POPA を含めた分析を分け検討を行なった。

2.2 枠組み

上記 3 つの目的を検討するために、予備調査と本調査を行なった。刑務作業によって製作される製品は多様であり、どのような製品について相対的に強く抵抗感が持たれるのかを検討する必要があった。そこで、予備調査では、本調査で回答を求める製品を特定するために、多様な製品を提示し、それぞれの製品を購入することにどの程度の抵抗感を覚えるかを尋ねた。

本調査では、予備調査の結果に基づき、3 つの製品（枕、湯呑、子ども用積み木）購買への抵抗感を検討した。具体的には、各変数の記述統計を算出した上で、目的 1 の検証のために、刑務所作業製品購買への抵抗感を従属変数、嫌悪感受性、道徳基盤、穢れ観を独立変数とした重回帰分析を行なった。次に、目的 2 の検証のため、嫌悪感受性の各下位因子を媒介変数として、道徳基が刑務所作業製品に与える効果の媒介要因を検討した。これらの分析に並行して、目的 3 を検討するために、穢れ忌避を含めた重回帰分析および媒介分析も行なった。分析には R ver. 4.2.0 を用い、特に媒介分析には lavaan package ver. 0.6-3（Rosseel, 2012）を用いた。

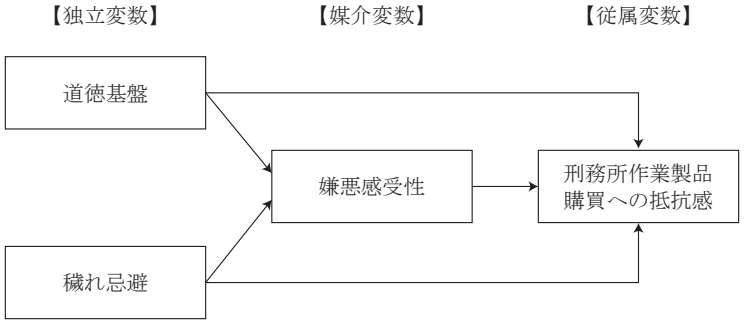

図 1：本研究で想定される変数間の関係性の図示

3. 予備調査

3.1 調査対象者と手続き

Web 調査会社 Freeasy に登録するモニターに回答を求めた。サンプルの代表性を担保するため、調査時最新の人口推計の年齢（5 歳区切り）と性別に従ってサンプルを割り付けた。不誠実回答者を除外するため、質問項目の中にトラップ項目（「この質問では、『抵抗感がない』を選んでください」）を含め、これに対して指示以外の回答をした回答者を除外した。400 名に回答を求めたところ、91 名がこのトラップ項目によって除外された。残りの 309 名（女性 162 名、男性 147 名、平均年齢 54.19 歳、標準偏差 16.98 歳）のデータを分析対象とした。調査は 2022 年 5 月 16 日に行なわれた。

3.2 調査内容

刑務所作業製品の通信販売を行なう団体のウェブページに掲載されたカタログ（公益財団法人矯正協会，2021）には、様々な刑務所作業製品が記載されている。そして、このカタログは、大カテゴリー（「売れ筋商品・おすすめ製品」など）、中カテゴリー（「まな板」など）、小カテゴリー（「まな板 小」「まな板 A 型」など）のように整理されている。これらのうち、大カテゴリーは数が少なすぎ、小カテゴリーは多すぎるように思われたため、中カテゴリーを用いて製品を抽出した。その結果、52 の製品が抽出された。ただし、この中には、①刑務所作業製品独自の製品名（「ブルースティック」「まる獄シリーズ」など）や、②かなりの部分重複し、抵抗感に差が生じることが予測しがたいもの（「紳士靴」と「婦人靴」など）、③必ずしも一般的な名称ではないもの（「そばがら枕」「レザートート」など）が含まれていた。そこで、第一著者および第二著者で合議の上、①独自の製品名は分かりやすい言葉に修正する（「ブルースティック」を「洗濯石鹸」に）か、対応する製品がないもの（「まる獄シリーズ」）は除外した。②重複する製品は統合した（「紳士靴」と「婦人靴」を「靴」に）。③一般的な名称でないものは一般的な名称に変更した（「そばがら枕」を「枕」に）。以上の統合・削除の結果、44 の製品が残った（一覧を Appendix 1 に示す）ため、これらについて、「犯罪をした人が刑務所に入った場合には、多くの場合、刑務所内の工場で仕事をする義務が課されます。以下で挙げられている製品はその仕事によって作られるもので、これらは地域で催される直売会やインターネット上のサイトで買うことができます。あなたはこれらの製品を（通常の小売店やインターネットショッピングではなく）それらの直売会やインターネット上のサイトから購入することにどの程度抵抗がありますか」と教示した上で、「1. 全く抵抗がない」、「2. 抵抗がない」、「3. どちらとも言えない」、「4. 抵抗がある」、「5. 非常に抵抗がある」の 5 件法での回答を求めた。また、上記③の処理にもかかわらず、一般的な名称ではないなどの理由からイメージがわかない製品が残っている可能性があると考えたことから、「イメージがわかない」の選択肢も用意した。提示順序の効果を避けるため、製品の提示順は回答者ごとにランダム化した。

3.3 結果

すべての製品について抵抗感の平均値を算出した（Appendix 1 参照）。その結果、多くの製品の平均値は 2 点台であり、多くの回答者は刑務所作業製品の購買に強い抵抗感を有していないことが示された。しかし、どの製品についても抵抗感率（「4. 抵抗がある」、「5. 非常に抵抗がある」と回答した者の割合）は 10 % 前後であり、抵抗感を覚える人は一定数存在することが示された。

本調査で回答を求める製品を特定するために、「イメージがわかない」割合（DK）が 5 % 以下のものの中から抵抗感が強い 3 つの製品を抽出したところ、「枕」（$M = 2.50$, $SD = 1.23$, DK = 4.50 %）、「湯呑」（$M = 2.32$, $SD = 1.14$, DK = 3.75 %、「子ども用積み木」（$M = 2.29$, $SD = 1.15$, DK = 4.50 %）が抽出された。

4. 本調査

4.1 調査対象者と手続き

2022 年 7 月 1 日および 2 日に、Web 調査会社 Freeasy に登録するモニターに回答を求めた。サンプルの代表性を担保するため、調査時最新の人口推計の年齢（5 歳区切り）と性別に従ってサンプルを割り付けた。また、不誠実回答者を除外するため、質問項目の中にトラップ項目（「この質問では、『抵抗感がない』を選んでください」）を含め、これに対して指示以外の回答をした回答者を除外した。650 名に回答を求めたところ、232 名がこのトラップ項目によって除外された。また、以下の 4 つの設問について、すべての項目に同一の回答をしていた 26 名も分析から除外し、最終的に 392 名（女性 187 名、男性 205 名、平均年齢 42.88 歳、標準偏差 12.36 歳）のデータを分析対象とした。調査の実施にあたって、多摩大学で倫理審査を担当する委員会より承認を得た。

4.2 調査内容

4.2.1 刑務所作業製品に対する抵抗感

予備調査で抽出された 3 つの製品（枕、湯呑、子ども用積み木）について予備調査と同様の教示文・設問で回答を求めた。

4.2.2 嫌悪感受性

嫌悪感受性を測定するため、岩佐他（2018）による日本語版嫌悪尺度（DS-RJ）を用いた。この尺度は 18 項目に 5 件法で回答を求めるものであり、3 因子構造である（中核的嫌悪、動物性嫌悪、汚染嫌悪）。二部構成であり、第一部では「1. まったくあてはまらない～ 5. とても当てはまる」、第二部では「1. 全く嫌な気持ちにならない～ 5. 極度に嫌な気持ちになる」から評定を求めた。この変数は、得点が高いほど回答者が嫌悪刺激に対して敏感であることを示す。各下位尺度の項目例は、「科学の授業中、ビン詰めで保存状態にされている人間の手を見ると気持ち悪くなるだろう」（第一部；動物性嫌悪）、「公衆トイレの便

座には、身体の一部たりとも触れたくない」（第一部；汚染嫌悪）、「牛乳を飲もうとして、腐ったにおいがした」（第二部；中核的嫌悪）である。

4.2.3 道徳基盤

道徳基盤理論における各道徳基盤の個人内での重要性を測定するため、金井（2013）による日本語版道徳基盤尺度（MFQ）を用いた。この尺度は30項目に6件法で回答を求めるものであり、最終的に5つの基盤ごとの得点が算出される。二部構成であり、第一部では「1. 正しいか間違っているかの判断に全く無関係である～ 6. 正しいか間違っているかの判断に最も重要である」、第二部では「1. まったく同意しない～ 6. 非常に同意する」から評定を求めた。この変数は、得点が高いほど回答者が当該基盤を重視していることを示す。各下位尺度の項目例は、「弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか」（第一部；危害基盤）、「不公平な行動をとっていたかどうか」（第一部；公正基盤）、「たとえ家族の誰かが間違いを犯したとしても、家族を大切にする気持ちを持ち続けるべきだ」（第二部；内集団基盤）、「子供たちは皆、権威を尊敬することの大切さを教わるべきだ」（第二部；権威基盤）、「たとえ誰も傷つかないとしても、不快極まるような行動をとるべきではない」（第二部；清浄基盤）である。

4.2.4 穢れ観

日本人の穢れ観を測定するため、Kitamura & Matsuo（2021）による穢れ忌避尺度（POPA）を用いた。この尺度は27項目に7件法で回答を求めるものであり（1. まったく当てはまらない～ 7. 非常によく当てはまる）、4因子構造である（精神清浄、信心尊重、身体清浄、感染忌避）。この変数は、得点が高いほど回答者が穢れ観を強く抱き、重視していることを示す。各下位尺度の項目例は、「滝に打たれたりする修行を行えば精神が浄化されると思う」（精神清浄）、「墓のお供え物を盗むとばちがあたると思う」（信心尊重）、「正しい性行動をとらないと、こころがけがれて幸せにならないと思う」（身体清浄）、「人と一緒に大皿や鍋をはしでつつくような食べ方は苦手である」（感染忌避）である。

4.3 結果

4.3.1 記述統計

仮説モデルの検討に先立ち、各変数を測定するそれぞれの項目を1つの変数として扱えるかを確認するため、内的一貫性の指標としてCronbachのα係数を算出した（表1）。その結果、嫌悪感受性に含まれる身体的・精神的汚染嫌悪のα係数が.60と若干低かったものの、許容しうる値であった。また、従属変数である抵抗感についても分布を確認したところ、製品間で特に大きな分布の差は見

表1：使用変数の平均値（*M*）、標準偏差（*SD*）、信頼性係数（α）、相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1 購買への抵抗感														
《嫌悪感受性》														
2 動物性嫌悪	.28 **													
3 汚染嫌悪	.32 **	.52 **												
4 中核的嫌悪	.26 **	.59 **	.57 **											
《道徳基盤》														
5 危害基盤	.12 *	.31 **	.20 **	.26 **										
6 公正基盤	.10 *	.16 **	.18 **	.15 **	.64 **									
7 内集団基盤	.19 **	.19 **	.28 **	.25 **	.45 **	.47 **								
8 権威基盤	.28 **	.23 **	.25 **	.24 **	.39 **	.43 **	.70 **							
9 清浄基盤	.28 **	.34 **	.31 **	.33 **	.70 **	.58 **	.56 **	.55 **						
《穢れ忌避》														
10 精神清浄	.08	.16 **	.35 **	.30 **	.38 **	.24 **	.39 **	.30 **	.40 **					
11 信心尊重	.16 **	.37 **	.44 **	.39 **	.51 **	.32 **	.40 **	.39 **	.54 **	.69 **				
12 身体清浄	.21 **	.36 **	.42 **	.40 **	.48 **	.31 **	.39 **	.31 **	.55 **	.64 **	.65 **			
13 感染忌避	.22 **	.35 **	.50 **	.46 **	.35 **	.33 **	.19 **	.16 **	.42 **	.37 **	.43 **	.48 **		
《属性変数》														
14 年齢	–.14 **	.09 +	–.09 +	–.08	.23 **	.15 **	.08 +	.04	.17 **	.04	.11 *	.11 *	.15 **	
15 性別	.17 **	.13 **	.24 **	.26 **	.02	–.06	–.09 +	–.05	.07	.22 **	.17 **	.16 **	.13 *	–.22 **
M	2.44	3.62	3.11	3.42	4.34	3.95	3.50	3.53	3.96	4.27	5.05	4.46	4.45	42.88
SD	1.12	0.81	0.69	0.75	0.81	0.75	0.73	0.71	0.77	0.95	1.10	0.90	1.07	12.36
α	.94	.74	.60	.82	.74	.70	.66	.63	.70	.83	.85	.76	.72	—

注：** $p < .01$, * $p < .05$; † $p < .10$。

受けられなかった。予備調査と同じく抵抗感率は 20 % 弱であった（枕 18.37 %; 湯呑 17.09 %; 子ども用積み木 16.07 %）。以上のことから、以下の分析ではすべての変数につき、各項目の算術平均（単純平均）を用いることとした。

次に、上の分析で確定された尺度得点を用いて、得られたデータの概観を得るために、使用変数の相関係数、平均値、標準偏差を算出した（表 1）。その結果、刑務所製品購買への抵抗感とは、汚染嫌悪が中程度（Cohen, 1992）の相関（$r = .32, p < .01$）を示した。他方、精神清浄との相関は有意でなかった（$r = .08, p = .11$）。年齢とは弱い負の相関を示した（$r = –.14, p < .01$）。それ以外の変数は弱い正の相関を示した（$rs > .10, ps < .05$）。

4.3.2 重回帰分析

続いて、目的 1 の検討のため、重回帰分析を行なった（表 2）。分析の結果、嫌悪感受性と道徳基盤のみを投入したモデル 1 においては、嫌悪感受性の下位尺度のうちでは汚染嫌悪（$B = .28, p < .01$, 95 %CI [.06, .29]）の効果が有意であった。また、道徳基盤の下位因子のうち、権威基盤（$B = .33, p < .01$, 95 %CI [.08, .34]）および清浄基盤（$B = .33, p < .01$, 95 %CI [.08, .37]）の効果が有意であった。モデルの決定係数は $R^2 = .18$、調整済み決定係数は $adj.\ R^2 = .16$ であった。

また、目的 3 の検討のため、嫌悪感受性と道徳基盤に加え、穢れ忌避を投入したモデル 2 でも変数間の関係の傾向は同じであった。すなわち、汚染嫌悪（$B = .30, p < .01$, 95 %CI [.06, .31]）、権威基盤（$B = .37, p < .01$, 95 %CI [.10, .37]）、清浄基盤（$B = .31, p < .01$, 95 %CI [.06, .37]）の効果が有意であった。モデルの決定係数は $R^2 = .19$、調整済み決定係数は $adj.\ R^2 = .17$ であった。

なお、以上の分析に含まれる各独立変数の VIF は 2.88 以下であり、以上の結果は多重共線性によるものではないと判断された。

4.3.3 媒介分析

次に、目的 2 の検討のため、間接効果を算出し、ブートストラップ法（反復回数 : 10,000 回）によって有意性検定を行なった。その結果、嫌悪感受性および道徳基盤のみを含めたモデル 1 においては、汚染嫌悪を媒介した清浄基盤の間接効果（$B = .06$, 95 %CI [.01, .13]）のみが有意であった。

他方、目的 3 の検討のため、嫌悪感受性および道徳基盤に加えて、穢れ忌避も含めたモデル 2 においては、上記の間接効果は有意でなく（$B = .04$, 95 %CI [–.03, .03]）、汚染嫌悪を媒介した信心尊重の間接効果（$B = .04$, 95 %CI [.01, .09]）および同じく汚染嫌悪を媒介した感染忌避の間接効果（$B = .07$, 95 %CI [.02, .13]）が有意であった。[(1)]

5. 考察

本研究では、刑務所作業製品への抵抗感に対する嫌悪感受性、道徳基盤の効果（目的 1）、嫌悪感受性を媒介した道徳基盤の抵抗感への効果（目的 2）を検討することを主な目的とした。また、これらの目的に加え、道徳基盤においては十分に捉えられない穢れ観にも着目し、上記の目的に関わる分析に穢れ観も含めてその効果を検討した（目的 3）。

表 2：刑務所作業製品に対する抵抗感を従属変数とした重回帰分析の結果

	モデル 1				モデル 2			
	B	*S.E.*	*β*	95 %CI	*B*	*S.E.*	*β*	95 %CI
《嫌悪感受性》								
動物性嫌悪	.15	.08	.11	[–.01, .23]	.12	.09	.09	[–.03, .21]
汚染嫌悪	.28	.10	.18 **	[.06, .29]	.30	.10	.18 **	[.06, .31]
中核的嫌悪	.06	.09	.04	[–.08, .16]	.05	.09	.03	[–.09, .16]
《道徳基盤》								
危害基盤	–.18	.10	–.13	[–.28, .01]	–.14	.10	–.10	[–.25, .05]
公正基盤	–.07	.10	–.05	[–.17, .08]	–.11	.10	–.07	[–.20, .06]
内集団基盤	–.13	.11	–.09	[–.22, .05]	–.10	.11	–.07	[–.21, .07]
権威基盤	.33	.11	.21 **	[.08, .34]	.37	.11	.23 **	[.10, .37]
清浄基盤	.33	.11	.23 **	[.08, .37]	.31	.11	.21 **	[.06, .37]
《穢れ忌避》								
精神清浄					–.12	.08	–.10	[–.24, .04]
信心尊重					–.09	.08	–.09	[–.24, .06]
身体清浄					.11	.09	.09	[–.05, .23]
感染忌避					.07	.06	.06	[–.06, .18]
R^2			.18				.19	
$adj.\ R^2$			.16				.17	

注：推定は最尤法による。*B*: 非標準化係数 ; S.E.: 標準誤差 ; *β*: 標準化係数 ; 95 %CI: 非標準化係数の 95 % 信頼区間 ; R^2: 決定係数 ; $adj.\ R^2$: 調整済み決定係数。** $p < .01$。

5.1 目的 1 および 2 について

分析の結果、目的 1 との関連では、刑務所作業製品に対する抵抗感は、嫌悪感受性、中でも汚染嫌悪と関連することが示された。その他の変数としては、権威基盤および清浄基盤が抵抗感と関連することが示唆された。目的 2 との関連では、汚染嫌悪を媒介した清浄基盤の間接効果が有意であった。つまり、清浄基盤が汚染嫌悪を媒介して抵抗感に影響するというメカニズムがあることが示された。反対に、刑務所作業製品に対するその他の道徳基盤の効果は嫌悪感受性によって媒介されるとは言えないことが示された。

嫌悪感受性のどのような側面が、穢れが乗り移ったと考えられるモノへの抵抗感をもたらすかについて、下位因子のレベルで明らかになったことは意義があるといえる。汚染嫌悪が強いほど刑務所作業製品に対する抵抗感も高いという結果は、刑務所作業製品が「汚染されたもの」と認識されたために忌避された可能性を示唆する。これは受刑者、すなわち道徳的逸脱者に感じられる穢れが刑務所作業製品に乗り移ったように感じられるという、汚染感を裏付けるものであろう。また、清浄基盤が抵抗感に効果を及ぼしていた結果は、その理論的成り立ちからも先行研究からも妥当と言える（Ekici, Yücel, & Cesur, 2021; Rosenfeld & Tomiyama, 2022）。上記の結果をまとめると、清浄性に関する価値観を重視するほど、汚染に対して嫌悪を感じやすくなり、穢れが乗り移ったと認識される刑務所作業製品に対して抵抗を感じるという、本研究で予測したプロセスが示唆されたといえる。

5.2 目的 3 について

次に、追加的な目的として、POPA も含めて行なった分析については、以下の知見が得られた。第一に、目的 1 の追加として行なわれた重回帰分析では、嫌悪感受性と道徳基盤に加えて POPA も追加したモデル 2 では、POPA の下位因子はどれも抵抗感と有意な関連を示さなかった。他方、目的 2 の追加として行なわれた媒介分析では、POPA を検討に含めなかったモデル 1 では汚染嫌悪を媒介した清浄基盤の効果が有意であったのに対し、POPA を分析に追加したモデル 2 では、POPA の下位因子である信心尊重および感染忌避の汚染嫌悪を介した媒介効果が有意であった。他方、道徳基盤を独立変数とした媒介効果（間接効果）はどれも有意でなかった。以上の結果は、POPA は抵抗感と直接的に関連するわけではないものの、直接的な関連要因である嫌悪感受性を介して間接的に関連するものであることが示唆された。

POPA の中でも、信心尊重および感染忌避が、汚染嫌悪を媒介して抵抗感に効果を及ぼすという結果からは、個人が重視している道徳観・価値観によって嫌悪対象に対する敏感さが異なり、それによって穢れを感じるモノに対する評価や反応が影響されるという機序が整理された。穢れ忌避の中でも、特に信心尊重および感染忌避でのみ効果が見られたことは、特定の性質が宿った（ように感じられる）モノに対する感性を説明するものであろう。信心尊重とは超自然的な存在による日常（人間が生きる俗世）への影響に関する意識であるため、単なるモノに対して物質的な性質を超えて精神的なものが宿っている（「穢れている」「神々しい」など）という主観的な意味づけにより、そのモノから受ける影響に敏感になるので、自身の生活に支障が出るという判断がされやすい。したがって、信心尊重が強い場合には、穢れという性質を持つと認識されるモノ（病原性を予測させる誘発子など）から受ける影響をより大きく評価すると考えられる。そのため、そうしたものを避けようとする動機が高いため、嫌悪を感じやすくなるというプロセスが想定される。

また、感染忌避について見ると、これは自分自身の清潔さへの志向性である。この価値観を重視している場合には、感染源を前にしたときに自身の清潔さに関する意識が顕現化し、自身が汚染されると感じ、それが汚染嫌悪に影響すると想定される。対して、汚染嫌悪を媒介しなかった身体清浄は性的タブー（例えば、近親相姦）に関する意識であるので、本研究で問題としている「伝染を経て何かに宿った性質」という対象を考えると、媒介が確認されなかったのは妥当と考えられる。

5.3 他理論との関連

最後に、本研究で得られた知見と他の理論的枠組みの関連について述べる。道徳的逸脱という象徴的害悪が病原体のようにモノに伝染する性質を持ち、病気に対する場合と同様の反応が誘発されることは、既述の先行研究と矛盾しない。この反応は、例えばエラー管理理論のような、本研究と異なる理論的立場からの説明がなされてきた。村山・三浦（2017）は、刑事事件の元被告との接触回避反応について場面想定法で検討し、実際にそのような人物との接触は避けられることを示している。本研究は先行研究の知見に心理的汚染という概念も加味し、象徴的害悪への回避反応を引き起こす心的プロセスの解明に新たな示唆を与えるものである。

さらに、行動免疫理論（Schaller, 2011）によると、行動免疫とは認知・感情・行動を制御することで疾病を回避する適応的システムである。この理論では、人やモノに対して感染を認知し脅威を評価することで嫌悪を感じたり、回避反応が生じるとされている。本研究においては、感染源の認知および評価に、道徳観と POPA によって測定された素朴な清浄志向性のそれぞれの下位因子が異なる働きをすることが示唆された。行動免疫理論の見地から考えると、本研究の文脈における穢れが伝染するという感覚は、感染するとみなされる性質が（行動免疫理論で主に想定されている）病原体や放射線（樋口・下田・小林・原島，2016）に対してのみ生じるだけでなく道徳的逸脱という、より広い意味でのネガティブな性質にも拡張可能であることを確認したといえる。

5.4 本研究の限界

本研究の限界について述べる。第一に、感染源への嫌悪感受性の前に道徳判断のフレーミングがあるという結

果に関して、逆方向の関係、つまり嫌悪感受性から道徳判断のパスも考えられる。例えば、Steiger & Reyna（2017）は、DS-RJ の原版である DS-R を用いて測定された嫌悪感受性は MFQ の全ての基盤得点を予測すると報告している。彼らの研究では、道徳判断における評価傾向フレームワーク（Appraisal Tendency Framework; Horberg et al., 2009）に基づいて、個別の感情が道徳判断に異なった影響を与えることを想定している。嫌悪感受性から道徳判断のパスのみを独立させて考えれば理論的には妥当と言えるが、それらの変数の関係性を含む全体的なモデルの検討はなされていないため、今後の理論的発展が期待される。

第二に、本研究においては媒介変数として嫌悪感受性のみを測定したが、他の媒介変数が存在する可能性もある。本研究では清浄基盤と嫌悪の対応を想定したが、ネガティブな道徳関連感情には嫌悪のほかにも怒りや軽蔑があることが知られている（福田・蔵永，2021; Konishi, Himichi, & Ohtsubo, 2020; Rozin et al., 1999）。さらに、道徳基盤と感情は一対一対応ではないとの見解もある（Cameron, Lindquist, & Gray, 2015）ため、嫌悪以外の媒介変数も検討に値する。

第三の問題点として、刑務所作業製品に対する抵抗感の測定方法が挙げられる。本研究では刑務所作業製品を購入することに対する抵抗感を訊ねていたが、本研究の狙いである心理的な回避反応だけでなく、購買そのものに対する評価も関連している可能性は否定できない。すなわち、例えば参加者にとって不要である品を購入することに対する抵抗感といった要因を排除できていない点で問題があると言える。

第四に、サンプルの質に関する問題がある。予備調査では 400 人中 309 人（77 %）、本調査では 650 人中 392 人（60 %）の回答のみが有効データとして分析された。オンライン調査のサービス管理システムの違いについて三浦・小林（2018）が検討しているが、調査会社モニタの方がクラウド登録者に比べ努力の最小限化傾向が低い。本研究の参加者は、トラップ項目で毀損データをできるだけ除外しようと試みたとはいえ、調査会社モニタの登録者であったことから、全体的に誠実な回答への動機づけが低い可能性がある。また、トラップ項目によりデータを除外したことによって、このようなテーマの研究にもともと関心が高い参加者のデータだけが分析されたという可能性は払拭できない。

5.5 今後の展望

本研究の結果は、POPA によって測定された信心尊重と感染忌避の方が MFQ の清浄基盤より抵抗感との関連が強いという部分で既存の清浄基盤に関する理論的枠組みを拡張しうるもので、複数の分野や理論に示唆を与えるものである。例えば、清浄性に関する意識を、刑務所作業製品への抵抗感という観点から捉えることで偏見や差別を引き起こす心理的プロセスの解明に貢献できる。穢れ意識が嫌悪感を通じて刑務所で作られた製品への抵抗感につながることは、受刑者と関連するモノへの評価がネガティブなものになりやすいことを意味する。感染源と考えられるモノへの評価と、そのモノを「感染させた」道徳違反者（すなわち受刑者）に対する偏見・差別との関連を実証することも期待される。性犯罪においては、清浄基盤を含む集団的道徳性を重視していると、加害者に加えて被害者も汚染されたと評価することも報告されている（Niemi & Young, 2016）。したがって、偏見・差別を特に清浄基盤と関連させて考えていく必要があるだろう。

象徴的害悪に関して、穢れ対象と認識される感染源の認知がどこまで拡張可能かということも今後の検討課題である。清浄基盤に関しては、他の基盤と比べて発達的には後から学習するという報告もあるため（Jensen, 2018）、年齢に注目する方向性もありうる。また、象徴的害悪である人物からその性質が伝染したモノ（または人でも）に関して、それ自体の特徴や物質的・時間的・空間的な本質の変容も検討の余地がある。例えば、Stavrova, Newman, Kulemann, & Fetchenhauer（2016）は、同じ音楽について、殺人犯が作曲したと教示された参加者は、それ以外の教示を受けた参加者に比べて、その音楽を好まないということを確認している。実際の例としては、2021 年に開催された東京五輪開会式に楽曲制作で参加していたミュージシャンが過去にいじめを行なったとして、彼自身だけでなくその（過去の作品も含めて）音楽も批判された（読売新聞オンライン，2021）。このように、ひとたび感染源との関連が認識されると、心理的汚染は物質的・時間的・空間的な制約を超えて生じ、感染源と関連するモノに対して穢れが感じられる可能性がある。

最後に、心理的汚染によって穢れが乗り移ったと感じられるモノに対する抵抗感を増幅あるいは低減させる要因を検討することも必要であろう。関連しうる要因のひとつに洗浄行動（手洗いや消毒など）がある。洗浄行動は道徳違反に対する判断を厳しくする効果を持つことが知られており（Zhong, Strejcek, & Sivanathan, 2010）、例えば、手を消毒させた参加者は、消毒させていない参加者より、清浄基盤違反に関して厳しい道徳判断を下すことが示されている（Helzer & Pizarro, 2011）。そのため、本研究で題材としたような、道徳的逸脱が感染したと認知されるモノへの抵抗感は、洗浄行動によって強まる可能性がある。一方で、日本においては「禊ぎ・祓え」という言葉に表されるように（国立歴史民俗博物館・花王株式会社，2022）、洗浄行動はむしろ汚染感を緩和する働きがあるとも考えられる。洗浄行動が「汚染された」と認識される対象への反応に与える影響やその方向を検討することは、心理的汚染に対する人々の反応やその心理的メカニズムを解明することに寄与するであろう。

謝辞

本研究は，科学研究費補助金（課題番号：JP21H05175: B01）の助成を得て行われた。本研究の一部は法と心理学会第 23 回大会（2022 年，千葉）で発表された。

注

(1) その他の間接効果はAppendix 2に示す。また、目的には含まれないが、総合効果および直接効果を提示しておくことは有益と思われるため、それぞれAppendix 3およびAppendix 4に掲載する。電子付録はOSF（https://osf.io/b3fje/?view_only=8a985a4a237c4a16b8a05a7609517342）で提供する。

引用文献

網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫（1983）．中世の罪と罰．東京大学出版会．

青山美樹（2020）．「嫌悪」の感受性と「神聖さ／純粋さ」という道徳的価値との関係性についての検討―日本人を対象とした調査から―．人間環境学研究，18（2），187-196．

Cameron, C. D., Lindquist, K. A., & Gray, K. (2015). A constructionist review of morality and emotions: No evidence for specific links between moral content and discrete emotions. *Personality and Social Psychology Review*, 19 (4), 371-394.

Cohen, J. (1992). Statistical power analysis. *Current Directions in Psychological Science*, 1 (3), 98-101.

Crone, D. & Laham, S. (2022). Clarifying measurement issues with the Purity subscale of the Moral Foundations Questionnaire in Christian and non-religious participants. Advance online publication. https://doi.org/10.31234/osf.io/bxtek.

Donnelly, K., Itakura, S., Gjersoe, N. L., Hood, B. M., & Byers, A. (2011). Moral contagion attitudes towards potential organ transplants in British and Japanese adults. *Journal of Cognition and Culture*, 11 (3-4), 269-286.

Ekici, H., Yücel, E., & Cesur, S. (2021). Deciding between moral priorities and COVID-19 avoiding behaviors: A moral foundations vignette study. *Current Psychology*. Advance online publication. https://doi.org/10.1007/s12144-021-01941-y

Frazer, J. G. (1890). *The golden bough: A study in comparative religion*. Macmilan.（フレイザー J. G.，吉川信（訳）（2003）．金枝篇　筑摩書房.）

福田哲也・蔵永瞳（2021）．軽蔑を特徴づける状況―嫌悪・怒りとの比較を考慮した探索的検討―．感情心理学研究，28（3），57-66．

Graham, J. & Haidt, J. (2010). Beyond beliefs: Religions bind individuals into moral communities. *Personality and Social Psychology Review*, 14 (1), 140-150.

Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101 (2), 366-385.

Haidt, J., McCauley, C., & Rozin, P. (1994). Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16 (5), 701-713.

Haidt, J. (2013). Moral foundations theory: On the pragmatic validity of moral pluralism. In P. Devine, & A. Plant (Eds.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 47, pp. 55-130). Academic Press.

Helzer, E. G. & Pizarro, D. A. (2011). Dirty liberals! Reminders of physical cleanliness influence moral and political attitudes. *Psychological Science*, 22 (4), 517-522.

樋口収・下田俊介・小林麻衣・原島雅之（2016）．行動免疫システムと福島県近隣の汚染地域の推定との関連．実験社会心理学研究，56（1），14-22．

Horberg, E. J., Oveis, C., Keltner, D., & Cohen, A. B. (2009). Disgust and the moralization of purity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97 (6), 963-976.

池田鮎美・山田祐樹（2021）．嫌悪のスーパースプレッダー―ヒトを介した道徳性嫌悪のベクター感染―．日本認知心理学会第18回大会発表論文集，PT2_25．

今田純雄（2019）．嫌悪感情の機能と役割―Paul Rozinの研究を中心に―．エモーション・スタディーズ，4，39-46．

岩佐和典（2021）．穢れと嫌悪．日本感情心理学会第29回大会．

岩佐和典（2022）．感情オノマトペを用いた嫌悪の主観的経験に関する研究．第40回日本生理心理学会大会・日本感情心理学会第30回大会合同大会．

岩佐和典・田中恒彦・山田祐樹（2018）．日本語版嫌悪尺度（DS-RJ）の因子構造，信頼性，妥当性の検討．心理学研究，89（1），82-92．

Jensen, L. A. (2018). The cultural-developmental approach to moral psychology: Autonomy, community, and divinity across cultures and ages. In M. J. Gelfand, C.-Y. Chiu, & Y.-Y. Hong, (Eds.), *Handbook of Advances in Culture and Psychology* (Vol. 7, pp. 107-143). Oxford University Press.

金井良太（2013）．脳に刻まれたモラルの起源―人はなぜ善を求めるのか―．岩波書店．

Kang, J. I., Kim, S. J., Cho, H. J., Jhung, K., Lee, S. Y., Lee, E., & An, S. K. (2012). Psychometric analysis of the Korean version of the Disgust Scale-Revised. *Comprehensive Psychiatry*, 53 (5), 648-655.

北村英哉（2021）．穢れと社会的排斥―感染忌避と宗教心の観点から―．エモーション・スタディーズ，7（1），4-12．

Kitamura, H. & Matsuo, A. (2021). Development and validation of the Purity Orientation-Pollution Avoidance Scale: A study with Japanese sample. *Frontiers in Psychology*, 12, 590595.

北村英哉・松尾朗子（2022）．事前登録追試研究―道徳領域と感情の対応性および，道徳違反の伝達性についての政治態度を含めた検討―．パーソナリティ研究，30（3），167-169．

Kleinknecht, R. A., Kleinknecht, E. E., & Thorndike, R. M. (1997). The role of disgust and fear in blood and injection-related fainting symptoms: A structural equation model. *Behaviour Research and Therapy*, 35 (12), 1075-1087.

国立歴史民俗博物館・花王株式会社（編）（2022）．＜洗う＞文化史―「きれい」とは何か―．吉川弘文館．

Koleva, S. P., Graham, J., Iyer, R., Ditto, P. H., & Haidt, J. (2012). Tracing the threads: How five moral concerns (especially Purity) help explain culture war attitudes. *Journal of Research in Personality*, 46 (2), 184-194.

Konishi, N., Himichi, T., & Ohtsubo, Y. (2020). Heart rate reveals the difference between disgust and anger in the domain of morality. *Evolutionary Behavioral Sciences*, 14 (3), 284-298.

公益財団法人矯正協会 (2021). CAPIC catalog 2021．https://www.e-capic.jp/uploads/CAPICcatalog2021__dai0610.pdf.（閲覧日：2023 年 2 月 25 日）

公益財団法人矯正協会（2022）．製品のご案内．https://www.e-capic.jp/products.（閲覧日：2023 年 2 月 25 日）

呉屋夏帆（2022）．高学年児童と大学生における『汚染』の理解の発達的検討―．行動免疫システムの観点から―．人間環境学研究，20（1），5-12.

Lee, S. W., & Schwarz, N. (2010). Dirty hands and dirty mouths: Embodiment of the moral-purity metaphor is specific to the motor modality involved in moral transgression. *Psychological Science*, 21 (10), 1423-1425.

松尾朗子・田中友理（2021）．道徳判断と嫌悪感情―神性・清浄基盤に着目して―．エモーション・スタディーズ，7（1），13-24.

三浦麻子・小林哲郎（2018）．オンライン調査における努力の最小限化が回答行動に及ぼす影響．行動計量学，45（1），1-11.

水谷竹秀（2021）．“塀の中”刑務所作業製品の深すぎる世界―売れ筋 1 位は洗濯洗剤「ブルースティック」―．文春オンライン．https://bunshun.jp/articles/-/46303.（閲覧日：2022 年 9 月 16 日）

村山綾・三浦麻子（2017）．刑事事件の元被告人に対するフォルスアラーム効果．認知科学，24（2），213-219.

村山綾・三浦麻子（2019）．日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証―イデオロギーとの関係を通して―．心理学研究，90（2），156-166.

波平恵美子（1984）．ケガレの構造．青土社.

Nemeroff, C. & Rozin, P. (1994). The contagion concept in adult thinking in the United States: Transmission of germs and of interpersonal influence. *Ethos*, 22 (2), 158-186.

Niemi, L. & Young, L. (2014). Blaming the victim in the case of rape. *Psychological Inquiry*, 25 (2), 230-233.

Niemi, L. & Young, L. (2016). When and why we see victims as responsible: The impact of ideology on attitudes toward victims. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 42 (9), 1227-1242.

野波 寛・坂本 剛・大友章司・田代 豊・青木俊明（2021）．NIMBY 問題における当事者はなぜ優位的に正当化されるのか？―地層処分場の決定権をめぐるマキシミン原理と道徳基盤の影響―．実験社会心理学研究，61（2），57-70.

Oaten, M., Stevenson, R. J., & Case, T. I. (2009). Disgust as a disease-avoidance mechanism. *Psychological Bulletin*, 135 (2), 303-321.

Olatunji, B. O., Moretz, M. W., McKay, D., Björklund, F., de Jong, P. J., Haidt, J., Hursti, T. J., Imada, S., Koller, S., Mancini, F., Page, A. C., & Schienle, A. (2009). Confirming the three-factor structure of the disgust scale—Revised in eight countries. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 40 (2), 234-255.

Olatunji, B. O., Williams, N. L., Tolin, D. F., Abramowitz, J. S., Sawchuk, C. N., Lohr, J. M., & Elwood, L. S. (2007). The Disgust Scale: Item analysis, factor structure, and suggestions for refinement. *Psychological Assessment*, 19 (3), 281-297.

Pavarini, G. & Schnall, S. (2018). The moralization of the body: Protecting and expanding the boundaries of the self. In K. Gray & J. Graham (Eds.), *Atlas of moral psychology* (pp. 279-291). Guilford Press.

Rosenfeld, D. L. & Tomiyama, A. J. (2022). Moral judgments of COVID-19 social distancing violations: The roles of perceived harm and impurity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 48 (5), 766-781.

Rosseel, Y. (2012). lavaan: An R package for structural equation modeling. *Journal of Statistical Software*, 48 (2), 1-36.

Rozin, P., Lowery, L., Imada, S., & Haidt, J. (1999). The CAD triad hypothesis: A mapping between three moral emotions (contempt, anger, disgust) and three moral codes (community, autonomy, divinity). *Journal of Personality and Social Psychology*, 76 (4), 574-586.

Russell, P. S., Piazza, J., & Giner-Sorolla, R. (2013). CAD revisited: Effects of the word moral on the moral relevance of disgust (and other emotions). *Social Psychological and Personality Science*, 4 (1), 62-68.

Schaller, M. (2011). The behavioural immune system and the psychology of human sociality. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London B. Biological Sciences*, 366 (1583), 3418-3426.

Sherman, G. D., Haidt, J., & Clore, G. L. (2012). The faintest speck of dirt: Disgust enhances the detection of impurity. *Psychological Science*, 23 (12), 1506-1514.

Stavrova, O., Newman, G. E., Kulemann, A., & Fetchenhauer, D. (2016). Contamination without contact: An examination of intention-based contagion. *Judgment and Decision making*, 11 (6), 554-571.

Steiger, R. L. & Reyna, C. (2017). Trait contempt, anger, disgust, and moral foundation values. *Personality and Individual Differences*, 113, 125-135.

Toyama, N. (1999). Developmental changes in the basis of associational contamination thinking. *Cognitive Development*, 14 (2), 343-361.

外山紀子（2019）．魔術的な心からみえる虚投射・異投射の世界．認知科学，26（1），98-107.

Troop, N. A., Treasure, J. L., & Serpell, L. (2002). A further exploration of disgust in eating disorders. *European Eating*

Disorders Review, 10 (3), 218-226.

Tybur, J. M., Lieberman, D., & Griskevicius, V. (2009). Microbes, mating, and morality: individual differences in three functional domains of disgust. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97 (1), 103-122.

山本幸司（2009）．穢と大祓 増補版．解放出版社.

読売新聞オンライン（2021）．五輪開会式の音楽担当，小山田圭吾氏が辞任…「いじめ」謝罪も批判収まらず．https://www.yomiuri.co.jp/olympic/2020/20210719-OYT1T50243/.（閲覧日：2022 年 9 日 16 日）

Wang, R., Yang, Q., Huang, P., Sai, L., & Gong, Y. (2019) The association between disgust sensitivity and negative attitudes toward homosexuality: The mediating role of moral foundations. *Frontiers in Psychology*, 10, Article 1229.

渡辺勝義（2005）．日本精神文化の根底にあるもの（四）―記紀古典に見る「穢（けが）れ」の意味について―．長崎ウエスレヤン大学紀要，3（1），1-12.

Zakharin, M. & Bates, T. C. (2021). Remapping the foundations of morality: Well-fitting structural model of the Moral Foundations Questionnaire. *PloS One*, 16 (10), e0258910.

Zhong, C. B. & Liljenquist, K. (2006). Washing away your sins: Threatened morality and physical cleansing. *Science*, 313 (5792), 1451-1452.

Zhong, C. B., Strejcek, B., & Sivanathan, N. (2010). A clean self can render harsh moral judgment. *Journal of Experimental Social Psychology*, 46 (5), 859-862

（受稿：2023 年 2 月 28 日　受理：2023 年 4 月 1 日）